

## 「目の見えない物乞い」

マルコの福音書 10:46～52

### はじめに

今日の舞台となる場所は、「エリコ」という町です。「月の町」という意味の、ここはかつて預言者モーセの従者、ヨシュアに率いられたイスラエルの民によって滅ぼされた、カナン人すなわち異教の町、異邦人の町でした。当時のエリコはその周囲を堅固な城壁に守られた難攻不落の要塞都市でしたが、イスラエルの民が神の命じられたとおりに声を上げ、角笛を吹き鳴らすと、その城壁は一瞬にして崩れ落ち、町は攻め滅ぼされました（ヨシュア 6:20）。エリコの民は老人から子供にいたるまで聖絶されましたが、ただラハブという遊女とその家族だけは救われました。なぜなら彼女は異邦人でありながらも、イスラエルの神こそ天地の神であると信じたからです（ヨシュア 2:11）。後に彼女はユダ族のサルマと結婚し、アブラハムからダビデ、そしてイエシュアへと至る系図にその名を記される重要な存在となります（マタイ 1:5）。異邦人でしかも遊女という、イスラエルの民からして見れば蔑みと嫌悪の対象でしかないこのラハブが、神の選びの民に加えられ、しかもメシアであるイエシュアにつながる者とされました。そんな彼女が生まれ、そして救われた町、それが今日の舞台となるエリコです。今日の内容はこのラハブについての出来事と、密接な結びつきがあると考えられます。それはつまり、イスラエルにつながることによって救われる、異邦人についての神のご計画が「型」たどるとして表された箇所だということです。今日のおもな登場人物は、異邦人にして遊女、ではありませんが、物乞いにして盲人という、同様にあわれな人と思われる人物です。バルティマイという名の、彼の身に起こった出来事とその記述を見てまいりましょう。

### 1. バルティマイ

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:46 さて、一行はエリコに着いた。そしてイエスが、弟子たちや多くの群衆と一緒にエリコを出て行かれると、ティマイの子のバルティマイという目の見えない物乞いが、道端に座っていた。

イエシュアはエルサレムに向かわれる途中、エリコを通過して行かれました。するとその町はずれに、「バルティマイという目の見えない物乞いが、道端に座って」いました。バルティマイ(בַּרְטִימָי)，バルは「子、息子」という意味で、彼の父の名でもあるティマイは「汚れる」という意味のターメー(טָמֵא)を由来とする名であると考えられます。このターメーは本来、血が汚されること、雑婚すなわちイスラエル人と異邦人が性的な関係を持つこと（創世記 34:5）を指す言葉ですから、おそらく彼も最初に述べたラハブのような、異邦人の血が入ったユダヤ人家系の者であったと思われる。実際にはそうでなかったとしても、彼がそのような存在、すなわちイスラエルと異邦人が結びついた状態を指し示す「型」であると考えられます。

バルティマイは目が見えませんでした。当時、目が見えない者は宮、エルサレムの神殿に入ることができなかったようです（Ⅱサムエル 5:8）。また彼は「道端に座っていた」ともありますが、「座る」という意味のヤーシャヴ(יָשָׁב)は「住む」とも訳せる言葉です。彼は住む家も家族もなく、神の家である宮にも入れず、人からも、神からも見放された、見捨てられたような存在、一見あわれな「物乞い」として見て

取ることができます。しかし、実はこの「物乞い」という言葉、ヘブル語ではヴァッケーシュ・ツェダーカー(הַקְּדֻשָּׁה וְצַדִּיק)と言い、これは直訳すると「義を求める(者)」となり、もちろんそれは人の善意による施し、近年災害時などでよく使われる言葉「義援(金)」を求める人、ということなのですが、彼が座っていた、あるいは住んでいた「道端」、ヘブル語のデレク(דֶּרֶךְ)は本来、エデンの園に植えられた、永遠に生きることができる「いのちの木への道」(創世記 3:24)を指す言葉であることから、うわべはあわれなただの物乞いであっても、そこには永遠のいのちが与えられる「神の国とその義を求める(マタイ 6:33)」者の「型」が表されていると考えられます。そしてそのような者は必ず、主イエシュアの御名を呼び求める者となることが次に表されています。

## 2. ダビデの子

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:47 彼は、ナザレのイエスがおられると聞いて、「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください」と叫び始めた。

10:48 多くの人たちが彼を黙らせようとたしなめたが、「ダビデの子よ、私をあわれんでください」と、ますます叫んだ。

バルティマイは、イエシュアに向かって「ダビデの子」ベン・ダーヴィド(בֶּן-דָּוִד)と叫び求めました。この呼び名は、文字通りのダビデ王の子、子孫というよりも、ダビデに告げられた以下の預言を指し示すものです。

サムエル記Ⅱ【新改訳 2017】

7:8 今、わたしのしもべダビデにこう言え。『万軍の【主】はこう言われる。わたしはあなたを、羊の群れを追う牧場から取り、わが民イスラエルの君主とした。

7:9 そして、あなたがどこに行っても、あなたとともにいて、あなたの前であなたのすべての敵を絶ち滅ぼした。わたしは地の大いなる者たちの名に等しい、大いなる名をあなたに与えてきた。

7:10 わが民イスラエルのために、わたしは一つの場所を定め、民を住まわせてきた。それは、民がそこに住み、もはや恐れおののくことのないように、不正な者たちも、初めのころのように、重ねて民を苦しめることのないようにするためであった。

7:11 それは、わたしが、わが民イスラエルの上にさばきつかさを任命して以来のことである。こうして、わたしはあなたにすべての敵からの安息を与えたのである。【主】はあなたに告げる。【主】があなたのために一つの家を造る、と。

7:12 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。

7:13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。

7:14 わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。

7:15 しかしわたしの恵みは、わたしが、あなたの前から取り除いたサウルからそれを取り去ったように、彼から取り去られることはない。

7:16 あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。』

このように「ダビデの子」とは「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」とあるように、「神の御子」を指す呼び名であり、また神が「とこしえまでも堅く立てる」という「イスラエルとその王、王座」を指し示す御名なのです。バルティマイはイエシュアがこの預言の成就となる御方であることを信じて、これを宣言したのかどうかは微妙です。なぜならこの後で彼はイエシュアを「先生」と言い換えているからです。しかしいずれにせよ彼にこの預言を指し示す御名を告白させたのは神です。

そしてこの預言には「彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる」という御言葉も含まれており、これはイエシュアが人のむちによって苦しめられ、そして殺される、十字架の受難と死という懲らしめを指し示しているのです。もちろんこれはイエシュアが不義を行うということではなく、イスラエルの民の行った不義、罪をイエシュアが背負うという意味です(イザヤ 53:6)。

### 3. 躍り上がって

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:49 イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい」と言われた。そこで、彼らはその目の見えない人を呼んで、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたを呼んでおられる」と言った。

10:50 その人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。

イエシュアはバルティマイを呼び寄せられました。すると彼は「上着を脱ぎ捨て、躍り上がって」来た、とあります。状況としては、人にも神にも見捨てられたような自分が、イエシュアに目を留めてもらったこと、呼ばれたことに歓喜している様子がうかがえますが、ここに使われているヘブル語が指し示す出来事は、それとはまったく真逆のものです。まず「脱ぎ捨てる」という意味のシャーラフ(שָׂרָף)は本来、自分の息子を放り出す、捨てるという意味の言葉です(創世記 21:15)。そして「躍り上がって」と訳されているクーム(קוּם)は本来、「襲いかかって」殺す、という意味の言葉なのです(創世記 4:8)。つまりここには父なる神に見捨てられ、人々の、ユダヤ人たちの霊的盲目さのゆえに殺される御子イエシュアの、十字架の死が指し示されているのです。事実、この後イエシュアはエルサレムに行かれ、ここでのバルティマイのように一度は「ダビデの子」として迎えられますが、その数日後には捕らえられ、まさにむち打たれ、「十字架につける」と言われるのです(マルコ 15:13)。これらの出来事はすべてイスラエルの、ユダヤ人たちが真理すなわち神のご計画に対して目が閉じられている、霊的盲目さのゆえに起こるものです。しかしこの盲目さについて、神はこのように言われています。

出エジプト記【新改訳 2017】

4:11 【主】は彼に言われた。「人に口をつけたのはだれか。だれが口をきけなくし、耳をふさぎ、目を開け、また閉ざすのか。それは、わたし、【主】ではないか。

イエシュアの十字架の死は、ユダヤ人たちの霊的盲目さのゆえに引き起こされる出来事ですが、それは人の愚かさのゆえでも、サタンの策略でもなく、ただ神であられる主のご計画によるものなのです。

この盲人バルティマイとイエシュアとの出会いは、状況としてはイエシュアが殺されること、十字架にかけられ死なれることを宣言され、そのためにエルサレムに向かわれる途中の出来事です。イエシュアはこの目の見えない人を通して、ご自分がなにゆえに殺されるのかということをごここに表しておられるのだと考えられます。罪とは本来、このような盲目さのゆえに引き起こされるものなのです。目の見えない人がつまずいて、「なぜつまずいたのか」と言ってそれを責め立てる人がいるでしょうか。罪責感という言葉がありますが、私たちは自分の罪も、人の罪も責めるべきではありません。なぜなら私たちはみな霊的に盲目とされているからです。ですからイエシュアもそれをお責めにならず、ただ黙ってすべての罪を背負い、十字架へと向かわれました。

#### 4. さあ、行きなさい

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:51 イエスは彼に言われた。「わたしに何をしてほしいのですか。」すると、その目の見えない人は言った。「先生、目が見えるようにしてください。」

10:52 そこでイエスは言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救いました。」すると、すぐに彼は見えるようになり、道を進むイエスについて行った。

ここでバルティマイはイエシュアを「先生」と呼んでいます。これは学校の教師でも医者でも法律家でもなく、聖書を教える教師としての先生です。ここに重要な事実が表されています。それはイエシュアから、イエシュアを通して聖書を見る、読む、学ぶということです。それによって神の視点、神のご計画に対する目が開かれる「目が見えるように」なるということです。イエシュアを認めない者、受け入れない者に聖書は理解できません。なぜなら聖書とはすべてイエシュアについて書かれた書物だからです（ヨハネ 1:45、5:46）。

そしてイエシュアはバルティマイに向かって「見えるようになれ」とは言われず、「さあ、行きなさい」ヘブル語でレフ・レハー(לֵךְ לְךָ)と言われました。この言葉は本来、神がイスラエルの父祖アブラムにかけられた御言葉です。

創世記【新改訳 2017】

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

この日本語に訳された記述では伝わりにくいのですが、直訳するとこうです。「主はアブラムに言われた。『さあ、あなたは行きなさい（レフ・レハー）。あなたの土地、家から、わたしが示す地へ…』」となり、神がアブラムを召し出された時の彼に対する第一声、最初の一言、それがこのレフ・レハー「さあ、行きなさい」という言葉なのです。そしてそれはアブラムとその子孫であるイスラエルの民を「大いなる

国民」とし、神の祝福の基とすることを指し示しています。この御言葉に対し、アブラハムはどこへ行くのかも分からないまま、知らないで、まさに「見えない」状態で出発しました。イエシュアの呼びかけに応えたバルティマイの姿がこれを指し示していると言えます。さらにイエシュアは彼に「**あなたの信仰があなたを救いました**」と言われましたが、この信仰とは、同様にアブラハムの信仰を指し示した「型」であると言えます。このように、イエシュアとバルティマイの間に、地上のすべての部族、民族が、イスラエルによって祝福されるという神のご計画が表されているのです。このご計画が成就、実現、完成することこそが神が提示しておられる究極の「**救い**」なのです。信仰であれば何でも良いものではありません。アブラハムに約束されたこのご計画に対する信仰こそが救いに至る信仰なのです。

## 5. 見えるようになる

こうしてバルティマイの目は見えるようになりました。「見る」という意味のラーア(הִרְאָה)は本来、人が、ではなく「神が見る、神が目を留められる(創世記 1:4)」という意味の言葉です。「**目が見えるようにしてください**」と言ったバルティマイの中に、私たちの願うべき願い、求めるべき姿が表されているのです。すなわち、神が見ておられるものを見、神が目を留めておられるものに目を留める、ということです。信仰の創始者、完成者と言われるイエシュアは、まさにそのような御方なのです。

### ヘブル人への手紙【新改訳 2017】

12:2 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。

そのイエシュアを見る、「**目を離さない**」ための、最も有効な方法は、聖書に記されたイエシュアの姿、その言動、行動に目を留め、注意深くこれを読む、ということです。するとそこには神のご計画の初め「**創始**」から終わり「**完成**」までが見えてきます。「神の国、御国」と呼ばれるものがそれです。イスラエルの父祖アブラハムはこれを神が設計し、建設される「**堅い基礎の上に建てられた都**」と表現しました。

### ヘブル人への手紙【新改訳 2017】

11:8 信仰によって、アブラハムは相続財産として受け取るべき地に出て行くようにと召しを受けたときに、それに従い、どこに行くのかを知らずに出て行きました。

11:9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をとともに受け継ぐイサクやヤコブと天幕生活をしました。

11:10 堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都の設計者、また建設者は神です。

目を留める、目を離さないと言っても、今の私たちにイエシュアが、神の国が実際に見えるわけではありません。それはこのアブラハムも同様で、ですから彼は「**信仰によって…待ち望んでいた**」と言い表されています。そして彼の生き様、人生にそれが反映されていました。すなわち「**彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をとともに受け継ぐイサクやヤコブと天幕生活をしました**」とあるとおりです。私たちが彼にならい、自分の考え方、生き方にそれが現れてくるほどに「神の国」を、その成就、到来を信仰によって待ち望む者とならせていただきたいと願います。聖霊の助け、導きがありますように。